

西南学院とアサ会

— ボールデン院長の解任を巡って —

金丸 英子

アサ会は、1930年代、独立伝道者であった田中遵聖（たなか・じゅんせい、本名種助 [1886-1958]、以後田中）によって始められたキリスト教運動で、現在の日本バプテスト連盟の前身にあたる日本浸礼派教会西部組合（以後西部組合）に大きな衝撃を与えた。西部組合とは、当時九州に点在していた南部バプテストの流れを汲む諸教会が伝道協力のために組織した団体である。アサ会の存在は、いわゆる「アサ会事件」として教会関係者の中で憶えられているが、その影響は実に西南学院にまで及び、第三代院長 G.W. ボールデン（以後ボールデン）の解任を惹き起こした。これについて『西南学院七十年史』は「院長となったボールデンを決定的な窮地に追いこんだのは、『アサ会』事件である」と記し、ボールデンの院長辞任をアサ会との関係で伝えている（『西南学院七十年史』上巻612頁）。本学神学部卒業生のバプテスト史研究者枝光泉は、この「アサ会事件」を「1930年代の初頭にあつて、『一教会の独立を認め、他の誰にも干渉されない（バプテスト派の）原則』からは離れていた西部組合が、ミッション依存の体質から抜け出し、歩み出そうとしたときに起った象徴的出来事」と説明している（『宣教の先駆者たち』、240頁）。枝光が指摘するように、「アサ会事件」が優れて教会関係の出来事であるならば、なぜそれが西南学院院長の辞職と結び付けて語られるのだろうか。

アサ会に関する研究は、ほとんどなされていないと言っても過言ではない。関連文献も皆無に等しい。強いて挙げれば、田中の息子である直木賞作家田中小実昌（1925-2000）が、『アメン父』で田中とアサ会についてノンフィクション風にその様子を伝えている（因みに、小実昌はこの本で1979年の谷崎潤一郎賞を受賞した）。研究文献に値するものとしては、辛うじて、『日本バプテスト連盟史1889-1959』（日本バプテスト連盟）、『西南学院七十年史』、枝光の『宣教の先駆者たち』（ヨルダン社、2001年）のみであろう。特に枝光の研究は、現存する唯一の邦文学術研究として貴重である。本稿ではこれら文献から学びつつ、ボールデンの自叙伝（英文、未刊行）、複数の宣教師による活動報告、個人書簡、日記、当時の高等学部教員波多野培根が残した文書を用いて、ボールデンの院長解任から見えてくる西南学院とアサ会の関係を

探り、そこから透けて見える学院史の一端を見てみたい。

1. 田中遵聖とアサ会：概説

田中は「アサ」について、夜の闇を突き破って新たな日をひらく朝日のように、人間の霊的暗闇を突き破る偉大な天来の光のことであり、その光を受けた人々の集まりが「アサ会」であると書いている。「アサ会」に集う人々は自らを「アサ人（びと）」と呼ぶこともあった。田中与キリスト教の出会い、在留先の米国ワシントン州シアトルにおいてであり、1912年2月4日、その地の日本人組合教会でユニテリアン¹の牧師久布白直勝から洗礼を受けた。その後、教会の中心的存在となっていくが、実家の都合で帰国を余儀なくされた。1916年には伝道者を目指して、現在の関東学院の前身にあたる東京学院（日本バプテスト神学校）というバプテスト派の神学校に入学した。ユニテリアンの田中がバプテスト派の神学校への入学を決めたのは、信仰的にユニテリアンの対極に位置するバプテストの学校で学ぶことは、自らの信仰にとって学ぶところがあるはずだとする田中自身の考えによるものらしい。そこで、バプテスト派の神学生には奨学金が支給されたが、田中はその受給対象とならなかったため、自費で学業を続けた。3年後の1919年に卒業し、若松バプテスト教会、東京市民教会（久布白による単立教会）、北九州・小倉のシオン山教会、呉バプテスト教会で牧師を歴任するも、その間、絶え間ない霊的葛藤を経験し、悶々とした苦悩の日々を送った。そのようななか、シオン山教会時代に先ほど述べたような魂の覚醒を経験し、紆余曲折を経て、1931年、呉でアサ会の教会を立ち上げるに至った。

田中は従来のいわゆる「伝統的キリスト教」から出て、刻々と力強く働く、活ける救い主を唯一の拠り処とし、その主に支えられて日々新たに信仰の道を歩む道を伝えた。田中によれば、日本のキリスト教は西洋を経由してきた「借り物」であり、そのような借り物をもって自らの信仰とするかぎり、形骸化して、結果的には体制化に陥り、教会も本来あるべき命を喪失するばかりか、自分の足で立つこともできなくなると見ていた。同じ理由から、教会建築や神学用語においても従来 of 伝統の枠に囚われなかった。小実昌は著書『ポロポロ』で、呉のアサ会の建物には十字架がなく、人々は椅子ではなく畳に座ったと記している。その理由は、教会建築や十字架などは宗教的なシンボルに過ぎず、たちまち偶像化してしまうので設けないという田中独特の信仰の信念によるものであったらしい。当然、アサ会の集まりも従来のそれとは異なり、

1 三位一体論を否定、単一人格の神を主張し、イエス・キリストの神性を認めず、聖霊を神の現存とする教派。

集会中に手を叩く、躍り上がる、叫び出すなど、一見奇行とも映ることが日常的に起こり、異言も語られて、小実昌曰く「わめきあっていた」教会だったので、騒音のために立ち退きを強いられるほどであった。

そのようなアサ会の勢いは燎原の火のように目覚ましく、1931年末には西部組合の諸教会にまで及んだ。田中と呉教会の有志は、近隣地域だけではなく福岡県内にまで伝道旅行に出かけ、信仰の証をするようになっていた。とりわけ福岡市内では、教勢の低迷に喘ぐ教会や信仰の閉塞感に悩む信徒たち、中でも信仰歴の長い役員レベルから教会の将来を囑望された青年信徒、また牧師までもがアサの集会に多く集まった。教会によっては、アサ会に端を発した分裂や閉鎖がおり、西部組合理事会や宣教師に対する批判が公然とおこなわれた。枝光によれば、1931年に呉バプテスト教会、八幡バプテスト教会が分裂、宇品講義所（伝道所）、長府教会は牧師の辞任によって伝道中止となり、姪浜講義所でも牧師が退任した。長府教会は翌年1932年にその門を閉じた。

西部組合理事会はただちに事態収拾に乗り出し、関係諸教会に嚴重な勧告をもってアサ会との関わりを自粛するように求めた。もしこの勧告を聞き入れない場合は、「重大なる結果を生ずるに至るべきやも保し難い」との決意をもって臨んだ（枝光『宣教の先駆者』224-25頁）。この「重大なる結果」とは、疑いもなく西部組合とアサ会の絶縁を含んでいる。たとえば、八幡バプテスト教会では、牧師藤本正高が西部組合理事長下瀬加守の突然の訪問を受け、牧師辞任を直接勧告されている。

2. 西南学院における「アサ会事件」

「アサ会事件」は、当時の西南学院の実質的な運営母体であったアメリカ南部バプテスト外国伝道局（以後、ボード）、そのボードの国内窓口として支部的な役割を果たしていた宣教団、学院理事会の大半を占めていた南部バプテスト派宣教師たち、学院の要と目されていた神学科とそこで学ぶ神学生たちを巻き込み、憂慮すべき問題として学内でその様相を呈することとなった。そしてすでに述べたように、それがボールデンの院長解任の主要因となっていった。

学内における発端は、神学生の中にアサの主張に共鳴する者たちが現れ、定期的にあサ会の集会に足を運ぶ者たちが出て来たことにある。その中には、後年本学教員となる河野博範、尾崎周一、近藤定次らも混じっていた。また卒業後、教会に牧師として赴任した後もアサ会との関係を温存する者もいた。学院理事会はこの事態を重く見て、1932年、数回にわたってこの件を討議した。その理由は、宣教団がアサ会の活動

を危険視していたからである。同年4月の定例理事会では結論を得ず、2度目の理事会が同月に開かれた。この理事会は場所を神学科内に移して行われ、神学科教師の出席が求められた。当時ボードは宣教団経由で学院に対して莫大な経済援助を行っていたが、それには神学科教員の給与と共に、神学生の授業料全額と奨学金も含まれていた。その恩典を、アサ会との関係が疑われていた2人の神学生が辞退を申し出たのである。2度目の理事会では、アサ会との関係の有無を問い直すために件の神学生が呼び出された。当該学生たちはその事実を認めたが、それに対して学院理事であり宣教団の財務担当であったノーマン・ウィリアムソンは、奨学金の支給を希望するならばアサ会との関係を即断つようにと迫った。また、もしこの勧告に耳を貸さないならば、今後、授業料全額を支払うようにとも言い渡した。当時、神学科科長も兼任していたボールデンは、理事会側のこのような対応に強い抵抗を覚え、これを宣教団と学院理事会による神学科と神学生への圧力と受け取り、自ら対峙する覚悟を決めた。

当時の学院理事の構成は、宣教師が理事として常に構成員の半数かそれ以上を占めており、C.K.ドージャー（以後、CKD）の後任人事を決定する理事会もその半数以上の理事が宣教師であった。1930年から院長に就任していたボールデンは、すでに1932年の時点で学院運営の手腕や方法を巡って同僚宣教師の批難を一斉に浴びていたもので、当然ながら学院の宣教師理事たちもボールデンに批判的であった。もっともボールデンの院長選任については、宣教師理事たちは当初から乗り気ではなく、院長人事の最終決定をしなければならない理事会では、6時間ももの長時間をその議事に費やしている。CKDの後任人事は最初から困難を極めたので、理事会は相応しい候補者が見つかるまでの一年間に限り、院長事務取扱（院長代理）の任をボールデンに任せていた。ところが、今となってはそのボールデンだけが最後の選択肢として残ったことによる議事の難航であった。理由は、CKD退任以後も依然として学内で燻ぶり続けていた日曜日問題²に対するボールデンの見解があまりに日本人寄りであり、宣



第3代院長 G.W.ボールデン

当時の学院理事の構成は、宣教師が理事として常に構成員の半数かそれ以上を占めており、C.K.ドージャー（以後、CKD）の後任人事を決定する理事会もその半数以上の理事が宣教師であった。1930年から院長に就任していたボールデンは、すでに1932年の時点で学院運営の手腕や方法を巡って同僚宣教師の批難を一斉に浴びていたもので、当然ながら学院の宣教師理事たちもボールデンに批判的であった。もっともボールデンの院長選任については、宣教師理事たちは当初から乗り気ではなく、院長人事の最終決定をしなければならない理事会では、6時間ももの長時間をその議事に費やしている。CKDの後任人事は最初から困難を極めたので、理事会は相応しい候補者が見つかるまでの一年間に限り、院長事務取扱（院長代理）の任をボールデンに任せていた。ところが、今となってはそのボールデンだけが最後の選択肢として残ったことによる議事の難航であった。理由は、CKD退任以後も依然として学内で燻ぶり続けていた日曜日問題²に対するボールデンの見解があまりに日本人寄りであり、宣

2 C.K.ドージャーが院長として日曜日を安息日として守ることを強く主張し、野球などのクラブの試合や活動を禁じたため、高等学部の学生たちがストライキを起こした事件。

教師として確固たる姿勢を示さなかったという宣教団側の見解に宣教師理事たちも一様に同意して譲らなかつたからである。確かに、日曜日問題に対するボールデンの対応はCKDとは正反対と言ってよいものであつた。そのため、一部の学生や日本人教職員から絶大な人気を寄せられ、それに対して上記の理由から宣教師たちが危惧を抱いたのである。最終的に理事会は次期院長としてボールデンを選んだが、その日のCKDの日記には、「日曜日問題に対するボールデンの態度はまったく話にならないので、われわれ理事会は彼を次期院長に選出すべきでなかつた」と心中を吐露している。

もっともCKDのボールデンに対する憂慮と不満は、すでにそれ以前から存在していた。ボールデンの院長選任が決まる数ヶ月前、息子であるE. B. ドージャー（以後、EBD）への手紙で、「院長として私が敷いてきたポリシーはボールデン博士によって台無しにされている」、「日曜日問題に対するボールデンの姿勢のために、宣教師の間でボールデンは孤立している」と書き、もしボールデンが次期院長に推薦されれば、宣教師理事全員は理事長に辞表を提出する覚悟であるとも書いている。これが現実のものとなれば、学院理事会の機能は麻痺することになるが、CKDはそれを承知の上で、なおもボールデンの院長就任を回避したかつたようである。

そしてそこに、アサ会と神学生の問題である。理事会に呼び出された件の神学生のひとり、自分がアサ会の集会に出るのは自らの信仰的決断によるものであつたと後懐しているが、当時ボールデンもこの点を支持して、このたびの学院理事会の対応はボードの奨学金を盾にとって、信仰における個人の自由を圧迫する脅迫紛いの行動であるばかりか、バプテストの立場から大きく外れているとして、神学科と学生たちを慮って神学科科長の続投を表明した。「続投を表明した」というのは、理事会はその時点ですでにボールデンの院長在任期間についてある決定を下しており、ボールデンもこれを受け入れていたからである。ボールデンの続投の意思を知つた宣教団は、時を経ずして会議を開き、院長職を含むあらゆる役職からボールデンを即刻解任するよう西南学院理事会に要望した。これについては後で触れる。

3. 宣教師たちとアサ会

宣教師たちのほとんどは、アサ会とそれを支持する日本人キリスト者に好感を抱いていなかった。とりわけアサ会については、「嫌悪」という表現がびつたりするほどであつた。フランクリン・レイは呉バプテスト教会の宣教師であつたが、当時牧師であつた田中について、「我々宣教団の活動にことごとく反対し、教会の役職をすべて廃止したばかりでなく、教会学校と婦人会以外の活動を全部停止に追い込んだ」とい

う酷評をボードに報告している。前述の八幡バプテスト教会の牧師藤本正高は、積極的にアサ会と関係していたが、その藤本についても、「教えにおいて異端的になり、行動においては狂信的になった」とアメリカの家族に手紙を書く宣教師もいた。

当時アメリカで学生生活を送っていたEBDもまた、CKDからアサ会問題に関する一切を逐一伝えられていた。それによれば、アサ会は「新約聖書の権威よりも、人間の経験を重視する神秘主義的なもの」で、田中が主張する日本人キリスト者の自立と自由は「放埒という名の自由」であり、バプテストが伝統的に標榜してきた立場とは似ても似つかぬものであるという内容が書き送られている。より致命的な言及は、当時南部バプテスト連盟を分裂の危機に追い込むほどに震撼させた南部バプテストの根本主義者J. フランク・ノリスと田中を重ね、アサ会と根本主義を同類と見なした上で、アサ会もまた西部組合を分裂させ、伝道活動の破壊を呼び起こす危険な存在と見做していた。このようなCKDの危惧は西部組合指導層にも共有されており、長老格の宣教師アーネスト・ウーナンは、ある日本人牧師から「もし宣教団が何もしないで手をこまねいていれば、日本のバプテストは破滅的な末路を辿るであろう」と警告されたと言われている。

しかしながら、日本人関係者全員がアサ会に対する宣教団や西部組合理事会の対応を支持していたわけではない。小野兵衛は西部組合理事であり、神学科教員でもあったが、八幡バプテスト教会に対する西部組合理事会の対処に抗議して自ら理事を退いた。神学科教師もまた、宣教団や西部組合理事会の対応に対して明確な支持を表明していた訳でもない。後になって河野は、当時神学科教員は誰ひとりとしてアサ会の神学的立場を誤りであるとは言っていないと述懐している。この事実を裏付けるものは河野の証言以外に存在しないが、1932年春、CKDがEBDに宛てた手紙にはそれを示唆する一文がある。CKDは当時の神学科教員を次のように見ていた。

「福岡の神学校の教師たちはこの件に関してまったく弱腰である。その内の2名は（アサ会）運動に対して態度を明らかにしているが、残りの3名はまったく頼りにならない。…（アサ会に対する）神学校の表明と態度は混乱を与えている。」

CKDが考えたように、アサ会そのものが南部バプテスト連盟の根本主義と同様に危険であるとすれば、宣教師たちと西部組合は、南部バプテスト連盟がそうであったように、万難を排して自らの組織と伝道活動を死守しなければならない。宣教団について言えば、牧師人事を含む教会関係の問題処理は西部組合理事会に委ねていたものの、財務面では、教会・学校の経済に関する最終的な権限のほとんどを手にかけていた

ので、教職員の給与を含む西南学院の経常予算、神学生の授業料と奨学金に関係する諸般の事柄についてその影響を直接に及ぼすことのできる立場にあった。加えて、宣教師が学院理事会構成員のほぼ半数を占めていたのであれば、宣教団側が学院の役職人事にかなりの発言力を持っていたことは想像に難くない。宣教団側から学院理事会に要求されたボールデンの即刻解任も、恐らくこの線上で発生したのであろう。

4. ボールデン解任

1932年5月4日、西南学院臨時理事会総会は、満場一致でボールデンに対してあらゆる役職から即刻退任を勧告する決議をした。これに先立つ3月7日の定例理事会は、ボールデンの院長解任は決議するも、土地家屋委員長をはじめとするその他学院の役職に関しては同年7月までの留任を認めていた。それに対して宣教団側が強く反発し、院長職のみならず、学院のあらゆる役職からボールデンを即刻解任するようという強い要望が学院理事会に突きつけられ、これに応える形で5月のこの決議に至った。当日の理事会記録によれば、解任理由として、アサ会とアサ会に関係した教会に対するボールデンの態度と、最近の理事会におけるボールデンの某理事に対する「極めて不適切かつ、受け入れ難い」態度の2点があげられている。

確かにボールデンは、神学生を含むアサ会に惹かれる人たちを公の席で弁護することがあった。簗町バプテスト教会（現在の福岡バプテスト教会の前身）では、牧師の下瀬加守がアサ会の信仰を証しはじめた青年の発言を封じようとしたばかりか、ボードの奨学金を辞退しようとした件の神学生の発言も同じように遮ろうとした。その教会の宣教師であったボールデンはその場に居合わせ、「バプテスト教会の会員には誰でも自分の意見を述べる権利がある。発言を続けさせよ」と下瀬に進言したと言う。当時、西部組合理事長でもあった下瀬は、この発言からボールデンがアサ会の擁護者であるという印象を持ち、あたかもボールデンがアサ会であるかのような風評が広まる元凶となったという関係者の証言が残されている。この風評は宣教師の耳にも入り、「ボールデン博士は宣教師として教会を助けず、アサ会に感化を受けた若者を擁護している」と確信する宣教師が出る始末であった。

同胞の日本人でさえ、必ずしも理解が容易でなかったと思われるアサ会の信仰的立場について、外国人のボールデンがどれほどの確にその内容を理解できていたかは疑問である。加えて、ボールデンと田中や呉の教会との間に深い個人的な関係があったとは思えない。田中が日本バプテスト神学校に在学していた時、ボールデンはそこで教鞭をとってはいた。しかし、ボールデンが残した資料には、田中との個人的な関係

やアサ会に対する同情を示唆するものはほとんどない。唯一はっきりしているのは、ボールデンが当時の多くの日本人パプテストや宣教師たちとは異なり、アサ会に関係した者たちを一方向的に非難することも、斥けることもしなかったということである。これについては、戦後、西南学院の教壇に立つようになった河野、近藤の両名が、河野は1950年に、近藤は1949年にそれぞれボールデンに送った私信から読みとれる。その中で両者は、神学生時代にボールデンから受けた親切に対して深い感謝の意を表し、日本での再会を懇望している。とりわけ河野は、当時の院長 W. M. ギャロットに、ボールデンの名誉回復と「あらゆる方法を駆使して」ボールデンが再び西南学院に戻れるように尽力すべきことを訴えたと記している（因みに、ボールデンは終生両名のこの手紙を大切に保管していた）。すでに述べたように、河野、近藤の両者はアサ会に関わっていた。その河野が「ボールデンの名誉回復」を時の院長に訴えたということの中に、院長解任の理由のひとつであったボールデンの「アサ会とアサ会に関係した教会に対する」態度が、実質的な学院の運営母体であるボードの窓口であった宣教団にとって「極めて不適切かつ、受け入れ難い」ものであり、日本人理事たちはその意向に積極的に抗わなかったことが推測される。

5. ボールデンとアサ会を結ぶもの：日本人の自立を求めて

ボールデンがアサ会に対して共感を覚えた点があったとすれば、恐らくそれは、日本側に対する宣教団のコントロールへの否と、宣教師に対する日本側の依存体質への批判の両方であろう。アサ会は西欧からの借り物の信仰を戒め、自主独立の気概をもって自分の足で立つ信仰生活の必要を唱えた。ボールデンは宣教団に対して、日本人キリスト者を尊敬し、日本人を伝道と教会形成の主体的な担い手に捉え、宣教師はそれを脇から支えるべきことを常々語っていた。日本人キリスト者に関しては、長年外国から圧倒的な経済援助を受け続けて来たために、自主独立の気概が失せている状況を憂いた。そして、少数ながらこの点に共鳴する意識的な日本人キリスト者もいたのである。

当時の西部組合諸教会は、教勢の停滞に悩んでいた。当初、その原因をアメリカの大恐慌によるボードの経済支援の縮小に求める声が多かった。しかし徐々に、それ以上に深刻な問題が実は日本人側にあるという声が聞かれるようになった。ボールデンが指摘したように、長年にわたってボードの潤沢な経済支援に慣れきっていた日本側の依存体質である。小野兵衛は、「不足しているのはボードの経済支援ではなく、日本人の伝道に対するハートと熱意である」と西部組合機関紙「聖戦」に意見を寄せた。

その上で、アメリカの金融危機による日本への支援縮小は、歓迎はしても憂慮すべきことではなく、日本人キリスト者が自分の足で立つようになる絶好の機会であるとまで述べた。ボードへの経済依存が小さくなればなるだけ、宣教師と日本人は同じ地平に立たざるを得なくなる。その結果、相互の間に尊敬と理解が生まれ、より成熟した協力関係を生む土壌が育つことにつながると、小野は書いて憚らなかった。

この小野に呼応するように、ボールデンも1932年3月発行の同紙に「不景気と伝道」という題で投稿している。発行日から、この原稿が学院理事会によるボールデン解任決議の直前に書かれたことがわかる。その中でボールデンは、「金銭の多寡が伝道活動の良し悪しを決めると考えるならば、それ大きな誤りである」と述べ、伝道活動の源を経済に置こうとする姿勢を批判した。批判の矢は日本人ばかりではなく、宣教師にも向けられた。宣教師が西洋の富をもったまま伝道の現場で「自分の小さな世界」を打ち立てて来たので、その結果、宣教師がもたらす西洋の豊富な富が日本人キリスト者の間に依存体質を作りだし、それが日本人と宣教師たちのパートナーシップの構築を大きく阻害してきたと述べた。恐らくボールデンは、当時の西南学院にもこれと似た構図を見たのであろう。ボールデンに院長辞任を求めた宣教師理事たちの当初の不満は、ボールデンの日曜日問題に対する対処にあったことはすでに述べた通りである。ボールデンは日曜日問題の解決にあたって、宣教師が半数またはそれ以上を占める学院理事会と日本人関係者が、同じ地平に立って協力しながら共に働く道を探った。その表れとして、ボールデンが召集した日曜委員会には学生をはじめ、ノンクリスチャンの学院関係者も加わり、学院側との間にコンセンサスを求めながら解決案を練り上げたが、その中で、日曜日問題に関して自らが積極的に責任の一端を負うという野球部の約束を引き出している。

そのボールデンは、1932年7月10日付の辞表を理事会に提出した。その最後には、「私の予想以上に、学校は素晴らしい働きを行って来た」という文章が挿入されている。それは次の文章に続いたものだった。

「学院は今後ますます、これまでよりも前向きで建設的な方針とリーダーシップが必要になるでしょう。そのためには、関係各位の誠意と配慮のこもったサポート、とりわけ日本の宣教団と南部バプテスト連盟外国伝道局のそれは必要となりましょう。

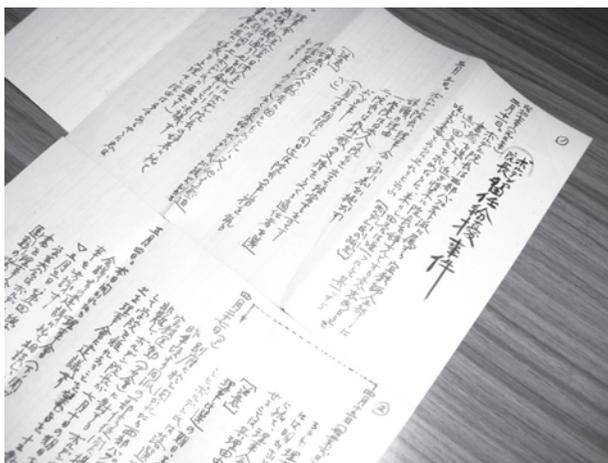
(The school needs and will need increasingly a more positive and constructive policy and leadership and it needs the hearty and thoughtful support of all concerned, especially of the Japan Mission and of the Foreign Mission Board of the Southern Baptist Convention.)

日曜日問題とならんで「アサ会事件」に対する自らの態度が、学院の将来にとってマイナスとなると判断した上での、自らの意志による辞任であった。

おわりに

ボールデンの解任は、解任撤回を求める高等学部学生のスライキを惹き起こすことになった。このスライキは、規模、地域への影響、保護者の関心の面で、CKDの院長退任を要求した以前のそれよりもはるかに深刻であった。学生側は、ボールデン解任の理由を日曜日問題に対するボールデンと理事会の見解の相違に見ていた。この渦中で、学院と学生・保護者双方の関係修復に尽力した高等学部教員の波多野培根は、「ボルデン^(ママ)院長留任問題に対する教師一同の立場（昭和7〔1932年〕6月30日）」と題したメモに、「宣教師間の不和」が今回の根本原因である記している。しかし、当の宣教師たちははっきりと「昨年頃より同派（西部組合）の一部信徒間に台頭して物議を醸せる一宗教運動（アサ会）に対するボルデン氏の（同情的）態度」に解任の理由を見ていた（波多野培根のメモ「ボルデン院長留任紛擾〔ふんじょう〕事件」）。

枝光は、「アサ会事件」を「1930年代の初頭にあつて、『一教会の独立を認め、他の誰にも干渉されない（バプテスト派の）原則』から離れていた西部組合が、ミッション依存の体質から抜け出し、歩み出そうとしたときに起つた象徴的出来事」と定義し



波多野培根による「ボルデン院長留任紛擾事件」の資料

た。この時点で、西南学院は遠くない将来、ボードと宣教師に依存する体質から抜け出さなければならない必然性をすでに秘めていたのであろう。枝光は西南学院に対する宣教団の影響力を「学校の最終的な方針は、ミッション（宣教団）の力で決まることを彼等（宣教団）はよく知っていた」（『宣教の先駆者たち』、260頁）と書いて、その現実を示唆しているように思える。少なくとも、西南学院の日本人教員たちの中にはその必要を認識しつつも、反面、忸怩たる思いで実現困難なその課題に直面していたことも事実であろう。換言すれば、当時の学院の日本人関係者は、それほどまでに学院における宣教師の存在と発言力に一目を置かなければならなかったということである。その心中を波多野は次のように書いている。

「然るに不幸にも、ボルデン氏と他宣教師諸氏との間の不和は調停の見込みなき程、深刻、且つ複雑なることを発見せるにより、予等は彼等に和解を勧むるも効果なきを思い従って院長留任の問題に関しては唯、理事会の採決に従ふ外、他に道なきを感ずるに至れり。別言すれば予等教師は此問題に関して、心ならずも厳正中立の位置に立てるなり、否立たされたるなり（教師が此問題に容喙 [ようかい] することは紛擾を倍々大ならしむる虞 [おそ] れあり）」（下線筆者、波多野「ボルデン院長留任問題に對する教師一同の立場」（昭和七年六月三十日記）より）。